

# 令和 7 年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 2 月 27 日

札幌市立 開成小学校

## 1 学校教育目標

人間性豊かな開成の子どもの育成

## 2 今年度の重点目標

誰もが楽しく安心して通える開成小

## 3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	「他者・自分」とのつながりを大切にする子ども	「他者・自分」とのつながりの大切さを実感できるような場づくりや教師の関りができたか	A	協働的な学習や縦割り活動、児童会活動、様々な行事を通して、「他者・自分」とつながることで、自分の考えが広がり深まったり、満足いく結果を残せたりする経験させることができた。 一方、まだ他者の立場に立ったり、自分の気持ちや考えに向き合い気付けない子どももいる。一人一人の実態に合わせた教師の関りができるよう、個別の見取りを強化していく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		小学生だけではなく、中等教育においても、他者と自分の関わりについて考えることは大切なことである。私たち大人が、子どもたちにより関わり方について、範を示していくことが大切になると思う。引き続き、他者と自分の気持ちの双方に向き合っていくような関わり方が育っていくことを期待している。				
人間尊重の教育	幅広い他者意識の醸成	・学級指導や道徳・保健指導等を通して、LGBTQへの理解を深めたり、命の大切さを伝えたりできたか。	A	道徳の授業や発達段階に合わせた保健指導を通して、相手意識を大切にする活動を行ってきた結果、友達の良いところを見付けたり、自分と友達の違いを意識したりすることができるようになってきた。他者を意識した思考や行動をしようとする子どもが増えてきた一方、まだ未熟な子どもも少なくない。授業に留まらず、様々な生活場面でも支援できるようにしていく。	A	A
「学ぶ力」の育成	「自ら学び、創造力豊かな子ども」へ	・子どもたち一人一人の主体性を大切に多様な学びを推進できたか。 ・授業におけるICTの効果的な活用を追求できたか。	A	主体的に学習に取り組める子を育てるために、「知りたい!」「解きたい!」「できるようにしたい!」という思いを醸成できるような授業の改善をしたり、教師の関りの工夫などを探究したりした。ICTの効果的な活用については、子どもの考えを共有したり、プログラミング的思考を育てるために活用できたが、情報モラル教育をさらに進める必要がある。	A	A
「豊かな心」の育成	「人間や自然を愛し、情操豊かな子ども」へ	・ふれあい活動を充実させ、グループの中で「憧れ」と「思いやり」の気持ちを育むことができたか。	A	「ふれあい企画」では、高学年だけでなく、中学年も企画・進行をする回があり、高学年のサポートを受けながら経験を積んで、他学年の仲間を思いやる気持ちをもって活動を創ることができた。6年生の子どもたちが、より自信をもって企画・進行できるように教師のサポート体制を強化することで、下の学年からの「憧れ」の気持ちをさらに育めるようにする。	A	A
「健やかな体」の育成	「健康で気力・体力の充実した子ども」へ	・マット・跳び箱週間等を継続したり、新たに運動機会を増やしたりして、子どもたちの一層の体力の向上や運動の習慣化を促すことができたか。	A	マット、跳び箱週間は単元の実施に合わせて行うことで、授業以外の練習時間として技術の習得や定着、子どもの自主性を高めることにつながった。また、中休みには「からだづくり教室」と名付けた、体力向上を目指した自由参加の企画を行い、多くの子どもたちが参加した。来年度は、子どもの意思で自由に参加できる企画を増やして、主体性の向上も目指していく。	A	A
いじめ対策	全教職員による組織的ないじめの防止と早急な対応	・毎日のシャボテンアプリの内容を把握し、子どもたちの心と体の健康把握と悩みへの早期対応に繋がられたか。	B	シャボテンアプリの活用で声を上げにくい子どもたちへのアプローチがしやすくなり、悩みやいじめの未然防止につながることができた。今後は、アプリの活用と共に子どもの様子を注視して早期発見ができるように、子どもたちの様子を捉える教師の目を育てる。また、迅速な組織対応を目指す。	B	A
一貫性・連続性のある教育(小中一貫した教育)	授業におけるICT機器の効果的な活用方法	・札幌教研の研究会を行ったり、ICT活用技能について発達段階に合わせた指導内容を共有したりすることができたか。	B	道徳の授業を行ったことで、児童生徒の道徳性の高まりと成長について小中間で共有し、今後の指導に生かすことができた。ICTの効果的な活用方法については、他教科でも生かせる活用方法であったため、普段の授業においても効果的な活用方法を追求し続ける。	B	A
学校関係者評価委員会による意見		いじめの対策として、シャボテンアプリを活用する取組は、すばらしいと思う。それゆえに、評価がBではないように思う。自己評価の中に、その理由が明確に書かれていないと思う。 ふれあい活動を通して、思いやりや上級生へのあこがれの気持ちが育まれていることが、児童会館の活動内でも感じられる場面があった。来年度以降も、ふれあい活動を大切にもらえたらと思う。				
学校独自に設定する分野	「責任を自覚し、最後までやりぬく子ども」へ		A	課題に直面した時、解決策の「選択肢」を自分で出させるために、大人が答えを教えるのではなく、ヒントを出して「選ばせる」ような関りを学校では大切にしている。	A	A
	健康に関する正しい知識や基本的な生活習慣を身に付けることができたか。		B	「あいさつ」「安全」「清掃」の観点で生活目標を月ごとに設定したことで、足並みをそろえて、生活習慣を身に付けさせることができた。取組を継続して、主体的に生活習慣を身に付けていける子どもを育てていく。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		子どもたちが主体的に活動できるような関わりが評価できる。 子どもたちと毎朝顔を合わせる立場からすると、挨拶ができていない子どもは1/3程度だと感じている。子どもたちは、挨拶の必要性を感じていないのかもしれない。挨拶をすることを進めたり強制したりするのではなく、「他者と自分とのつながりをつくるための一つの手段として大切なのであって、挨拶をすること自体が大切なのではない。」というようなことを、大人の行動(手本)から学ばせていく必要があるのかもしれない。				